

メイン・テーマ解説

2018年1月7日 IDTF プレシンポジウムの発言より

四次元の 詩人ふたり 『かぐやavec アインシュタイン』



左より四方田氏、丹下氏、察さん、司会の西田敬一氏

X-IDTF実行委員会は一昨年の第12回「北斎とかぶこうー」終了後直ちに第13回のメインテーマについて論議を始め、難産の末ようやく『かぐやavec アインシュタイン』と決定し、例年のIDTFプレシンポジウムに登壇者として、四方田大彦氏、映画史・比較文学研究、詩人にお願いをしました。四方田氏は、第11回X-IDTF『つくり断』や、タデウシユ・カントル生誕100年祭や、自身翻訳をなさったイルダ・イルスト作『わたしの犬の眼で』を自ら朗読されるなどシアターXではおなじみの方。その四方田さん推せん察美千子さんは、外務省勤務やコピーライターを経て作家に。古都に憧れ首都圏より「奈良」に移住。絵本、詩、小説、自作朗読と幅広く活躍中のユニークな方。そして丹下一氏は、豪華エッセイ作品オペラ化の際に演出の他、民俗芸能をベースに現代演劇や東北の震災をテーマにした「Handeys Hamlets」シリーズの上演など国内外で活動。俳優としても活躍。

わたしからも 時間光船で

『詩の道』を往こう

『察美千子さん』

四次元 死後の宇宙へ 往けるのかも？

私の祖父察佐吉(1891~1945)は、英語教師をしながら翻訳や科学ライターの仕事もしており、おそらく日本最初の科学ジャーナリストだったと思います。一般の人たちに当時の先端科学を紹介、アインシュタインや量子論関係の翻訳・著作を4冊残しています。宮澤賢治は、そのなかの『通俗第四次元講話』や『通俗電子及び量子論講話』を読んでいました。



アイノシユタイは、ノーベル物理学賞を

受賞した大正11年に来日し全国で講演をして廻りました。祖父は講演前日に前座として『相対性理論とは何か』ということに六千人の聴衆の前で話しています。当時の日本人は時間と空間を飛び越えて自由に往き来できる「四次元」という存在を捉え、死後の世界は存在するかもしれない、死後の世界に往けるかもしれないとイメージしたのです。



時間光船で かくや姫とアルベルト坊や 奥のロラ宇宙 田村登留・画

宮澤賢治は、妹のトシさんが亡くなり「死後の世界に旅ができてトシと話ができないいだらうか」という想いが形となったのが『銀河鉄道の夜』です。その中に「こんな不完全な幻想第四次元の銀河鉄道なんか…」という言葉がありました。

『丹下一さん』

地球星 の中の 日本とは何か？

まさぐるろ

私は早稲田大学で日本民俗芸能史の山伏神楽を研究しながら演劇活動をしていることと民俗芸能の研究が密接に関係していくことが非常に大事と学びました。日本人のルーツは何かという問いを踏まえた上で、今の日本とは何かを探求する試みとして和歌山県の熊野で『古事記』をベースにした作品をつくっていました。

『四方田大彦さん』 姫は地上の 権力 を 笑いものとし 去った



の 世界で アインシュタインの名前は 現在でも 頻繁に出てきます。ロバート・ウィルソンとフリーリップ・グラスの『浜辺のアインシュタイン』(1976年)という作品は演劇でもなく、ダンスでも、音楽でも、文学でもないパフォーマンスという言葉が使われました。時間と空間の認識を変えたアインシュタインのように、アートの既成概念を変えたという意味でタイトルに『アインシュタイン』を入れたのだと思ふ。

『竹取物語』を取り上げる時、まず「竹とは何か」を考えなければいけない。竹は東南アジア一帯に野生している

て、いつ日本に渡ったのかは判りませんが『竹取物語』ができた8世紀、奈良時代には竹林がありました。

当時の定住民は農民でした。竹藪に入っていた竹取の翁について、中上健次は「自分の土地を持つていない、非農耕民であるという意味だ」と言っていました。つまり竹取の翁は被差別民ではないかということ。農耕民とそれ以下の人間が区別される社会システムが整った時代に『竹取物語』ができたことは非常に重要だと思います。もし中上の直観が当たっているれば、竹は日本の芸能とどのような関係にあるかが問題になり、翁とは何かという問題もありません。能楽に登場する翁はめでたいことを祝うために登場する老人であり、日本の芸能の中で一番古いものを体現しています。『竹取物語』ではその翁が竹を取り、竹を編んでザルやカゴを造るわけ



このころから 『竹取物語』を 読み解けます。

『竹取物語』はフィクションのなかで、深い深い本物の日本のルーツをたくみに組み合わされてつくられています。読み解く内にあるいろいろなメタファーが解つてきます。たとえば、数字についてみてみますと、『玉串記』は「8」という数字に満ちていますが、『竹取物語』は「3」という数字に満ちています。その中で、なぜかかぐや姫に対する求婚者が5人なのか。そういうところから、このころから『竹取物語』を、地上の権力を笑いものにして、再び天上界へ戻っていったのです。

です。

映画『伊豆の踊子』(山口百恵主演・西河克己監督)は日本の芸能史を深く踏まえています。冒頭、四つ竹をカチャカチャと鳴らすクロウズアップから、その四つ竹を持つ山口百恵の顔が映り、踊子が被差別民であるということがわかります。竹と芸能の関係は奈良時代から続いています。

1988年、草月流二代目家元の勅使河原宏さんが『利休』という映画を撮りましたが、その中で利休自身が竹に注目します。現在利休は日本の伝統的な美を創ったと言われていますが、当時の利休は一番新しい美だったわけです。利休の茶道においても、あるいは能楽においても竹の問題は非常に重要であり、日本を代表する古典文化や伝統文化の多くが農地を持たない非農耕民によって考案され、継承されてきました。それが日本の芸能の根本にあるのです。

律令制度の社会の中で一番低い位置におとしめられた人々の中から出てきたのが竹取の翁だったのです。しかしかぐや姫は実は月の世界からやって来たやんごとなき人であり、地上世界には天皇、貴族、農民がいて、賤民の竹取の翁がいる。一番下位の人のもとに天上界で最も高貴な姫が罪を犯してやってきた。この空間の振幅は、人間のつくり出したヒエラルキーであるわけです。姫は地上の権力を笑いものにして、再び天上界へ戻っていったのです。